

シナイ通信

第18号

平成 23 年 4 月 27 日

NPO 法人 シナイモツゴ郷の会



TEL/FAX 0229-56-2150

MAIL shinaimotsugo93ks@ybb.ne.jp

<http://www.geocities.jp/shinaimotsugo284/>

989-4102 宮城県大崎市鹿島台木間塚
字小谷地 504-1 鹿島台公民館内

のりこえよう東日本大震災

シナイモツゴの成果をゼニタナゴ復元へ

東日本大震災で被災された会員に心からお見舞い申し上げます。現在も連日の余震に悩まされ続けていますが、魚の繁殖期を迎え出来る範囲で活動を開始します。

今、震災によりあらゆる取り組みの見直しが必要となっています。私たちはこれまで、貴重な生物が生息するため池生態系を保全し周辺水田における生産米の付加価値を高めながら、コストをかけずに長期安定して保全することを目指してきました。これは農業者や市民と連携し地域ぐるみで推進する持続可能な生態系保全モデルとして高く評価されています。したがって、震災の影響で物資や資金の不足が懸念されますが、私たちの活動への影響は少ないと考えられます。自然再生活動は継続が最も重要です。みなさまのご参加をお待ちしております。

成果の多かった 2010 年

2010 年度も様々な事業と取り組みました。シナイモツゴ生息池の調査では、予想以上に多種類のプランクトンが出現し、驚かされました。また、シナイモツゴやゼニタナゴなどの移植実験により、ため池ではこれらの絶滅危惧種は条件が整えば速やかに定着する可能性のあることが示されました。これらのことから、ため池は絶滅危惧種を含む多様な魚種が生息可能であり、まさに淡水魚の Hot Spot と言ってもいいと思います。今後ため池生態系を活用した生物多様性の保全を推進したいと考えます。

ゼニタナゴ復元の取り組みを本格化

当会が目標とする水辺の生態系復元を実現するためには、シナイモツゴと同時に他の在来魚も生息できるようにする必要があります。これまでシナイモツゴの

復元で開発した技術や構築した保護体制は、生態学的知見に基づいて適切な改良を加えることにより他の在来種の保全にも十分応用可能と考えられます。

次に取り組むのは東北地方で最も絶滅が危惧されているゼニタナゴです。ゼニタナゴは、産卵卵基質や食性がシナイモツゴと異なるため、両



両種は数10万年～数100万年の長期にわたり同所で共存してきたと考えられます。実際、当地区の桂沢ため池では、両種が100年以上にわたって共存して繁殖してきました。今後、数年間、東北地方の代表的な在来種である両種を中心に在来魚が生息するため池づくりと取り組みます。生態の異なる在来魚を複数種保全することで安定したため池生態系を復元し、貴重な在来魚を天然環境で安全に長期保全する技術開発と体制作りを進めます。

成果の発信と普及

昨年10月に大崎市古川で、今年の2月に大崎市鹿島台で全国シンポジウムを開催し、当会の成果を含む全国の最新知見や考え方を紹介し、取り組むべき課題について議論しました。また、これまでに開発した技術マニュアルを作製し、パンフレットとして印刷しましたので、ご希望の方はご連絡下さい。

シナイモツゴ里親の現状と今後の活動

理事長 二 宮 景 喜

3. 1 1は、東北地方に住む我々にとって忘れることのできない悲しい日になってしまいました。この会報をお読みいただく方の中には、大切な家族や、親しい友人、知人を亡くされた方もおられると思います。心からのお悔みを申し上げます。また、さまざまな被害にあわれた方にも心からお見舞い申し上げます。

本会の会員からは人的な被害はなく、ほっとしておりますが、本会の活動が地震の後遺症から立ち直り、普段通りに戻るには、今年1年いろいろやりくりが求められると思いますので、皆様には健康にご留意の上、格段のご協力をお願いいたします。

さて、シナイモツゴの生息池と里親の学校の状況について、本日（4月21日）現在の情報に基づいてお知らせいたします。

3月11日の本震は、大崎市で6強という今まで経験したことのない激震で、しかも時間の長い地震でしたが、鹿島台地区のシナイモツゴの生息池では堤の崩れたところなどはなく、被害についての報告はありませんでした。しかし、個人の里親が家庭で飼育していた分については、水槽が倒れるなどして、大きな被害があったようです。私の家では、物置に設置していた飼育槽から30尾ほどいたシナイモツゴの半数以上が水と一緒に飛び出し、コンクリートの床でバタバタしているありさまでした。揺れがおさまった直後に気付かなければ、全部死なせるところでした。その後停電でエアレーションが使えず、また4月7日深夜の大きな余震でも再び水槽から飛び出したものがあり、現在元気であるのは20尾ほどです。

各里親校については、新年度の取り組みについての打ち合わせを始めたところで震災にあいました。各校の被害の様子はさまざまです。鹿島台小学校の飼育池では、地震後の断水もあって一時水深が半分以下になり、水質も悪化したようでした。水が減った原因がはっきりしませんので、学校と相談しながら、場合によっては池の修理をする必要があると考えております。今年の稚魚の回収は多くは期待できないようで残念です。

東松島市立小野小学校と石巻市立開北小学校は、地震前に訪問した時には稚魚が群れて泳いでおり、回収

を楽しみにしていたところでした。両校とも校舎は無事でしたが、開北小では1階床上まで、小野小では校庭まで津波が入りました。小野小の池では塩水が入り、シナイモツゴの稚魚100尾以上が死んで浮いていたそうです。開北小学校の池は塩水が入った上に、底が割れて、干上がっている状態でした。今後、池の水の塩抜きや池の補修が必要な状況です。

仙台市立鶴谷小学校については、一部の建物に被害があり、飼育池周辺が立ち入り禁止の状態になっているとのことです。松陵小学校では地震の被害は特にありませんでした。幸いなことに、鶴谷小と松陵小では稚魚が順調に育っているという報告をいただいておりますので、今後の放流やほかの里親への配布は、仙台の2校に頼ることになりそうです。両校の里親の皆さんには、5月の回収までなおのこと大事に育てていただきたいと願います。

美里町立小牛田小学校の飼育池は地震の被害はなかったものの、稚魚の姿は見られません。昨年の天候不順がたたたり、飼育そのものがうまくいかなかったと思われる。

以上のような状況から、今年の里親校の活動については、現在のところ、計画、予定が具体的に決まっておりません。被災後の各学校の体制を整えることが最優先で、その後、今年の里親活動を各校の授業計画の中にどのように取り組んでいくか、それぞれの学校に検討していただくことになります。従来通り取り組む場合は、学校のご要望に応えられるように、本会としてできるだけのことをしなければならないと考えております。

それから、新たに鹿島台第二小学校から里親になりたいというお話があり、昨年末から話を進め、具体的な準備に入っております。保護者の方から立派な大型の飼育槽が2台寄贈され、すでに設置場所も決定しております。また、郷の会のインストラクターが、事前のオリエンテーションをかねて、全校生徒にシナイモツゴの話をしてまいりました。鹿島台二小は大迫地区にあり、旧品井沼に接した丘の上にあります。これで、シナイモツゴゆかりの鹿島台の小学校が2つとも里親校になっていただくことになり、大きな意義を感じ喜

んでおります。

以上のように、震災への対応、また新しい里親校の参加など、忙しいスケジュールを今後こなさなければならぬと思いますので、今まで里親活動にタッチしてこなかった会員のご協力もよろしくお願いいたします。

この度の震災では、計り知れない大自然の猛威の中、人間の無力さと限界を思い知らされました。今まで自然を甘く見てきたことに対して、「想定外」という安易な言葉で責任逃れをすべきでないと感じています。自然を恐れながらも、自然を大切に、親しんでいくというのが、昔からの人間と自然の関わりかたでした。

我々はこれからも海や山や川に深く関わって生活していくほかありません。先祖代々洪水と闘いながら、自然と共生し、田畑を守り、米つくりを放棄しなかった鹿島台の農民の不屈の生き方も一つの手本ではないでしょうか。

われわれの活動の目標である、自然を守り、壊してしまった自然を復元することの大切さに変わりはありません。大変な困難のなか、とりあえずは日常の営みを回復することが第一歩です。里親活動も含めて、本会の活動を停滞させないように頑張りましょう。

がんばろう 宮城 義援金を寄付、被災した里親小学校へ文房具寄付

深刻な被害を受けられた方々のために、4月の定例会・理事会で寄付を募り、28,000円を義援金として寄付しました。また、津波の被害にあった東松島市立小野小学校と石巻市立開北小学校に、本会が保管していた印刷用紙や会員が持ち寄った文房具類を寄附いたしました。ご寄付いただいた皆様、ありがとうございました。

ゼニタナゴ産卵状況調査(H22.12.18)報告

坂本 啓

昨年12月に毎年恒例のゼニタナゴの産卵状況調査が行われました。これはゼニタナゴの生息するため池で、二枚貝の鰓の部分に産み付けられたゼニタナゴの幼生を1つ1つ貝を開いて調査していくものです。今回は3つのため池(S池、T池、A池)で調査を行いました。結果は下表のとおりです。

2004年に移植したT池では47.2%、2005年に移植したS池では30.6%の産卵率でした。産卵する貝の大きさは、T池のヌマガイは110mm程度、S池のタガイでは殻長70mm程度が好まれているようでした。一方、2010年に移植したA池では産卵率14.0%と他の2つのため池に比



ゼニタナゴ産卵状況調査 (12月鹿島台)

べて低くなっていますが、それでも移植したゼニタナゴがちゃんと繁殖していることが確認されました。また、産卵に利用されるタガイでも小型のものが捕獲され、二枚貝自体も繁殖していることが確認されましたので、ゼニタナゴの生息ため池として良好な環境であると言えます。シナイモツゴ郷の会では、今後も環境及び繁殖のモニタリング調査を行いながら、ゼニタナゴやシナイモツゴの生息地拡大に取り組んでいきたいと考えています。

	T池	S池	A池
二枚貝の種類	ヌマガイ	タガイ	タガイ
調査した二枚貝の数	36	36	50
ゼニタナゴが産卵していた二枚貝の数	17	11	7
産卵率(%)	47.2	30.6	14.0

生物多様性交流フェアに参加して

鈴木泰文

大崎市産業経済部からの要請を受けて、生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）の開催期間中に大崎市の取り組みを紹介するため、10月19～20日にかけて愛知県名古屋市「白鳥地区」で開催された生物多様性交流フェアに参加してきました。

当日1時過ぎに会場へ到着、早速、市職員の方と説明方法などを打ち合わせ、市のCOP10用ジャンパーを着て、当会のパンフレット（郷の会紹介パンフ、ヒシプロジェクト、シンポジウム「よみがえる魚たち」のチラシ）を多数準備し、見学者を待ち受けました。

会場はCOP10会場の名古屋国際会議場に隣接し、国際的な発表と交流の場です。国内外の政府や自治体、国際機関、NGO、NPO、学術団体、企業など127団体の出展者が、生物多様性に関するプロジェクトやコンセプト、アイデアを持ち寄り、ブース展示等により広く情報を発信して相互交流していました。参加者はさまざまな取り組みや課題に触れ合い、活動を継続していくための大きなヒントやきっかけを得ることができたと思います。

市としては大崎市、岡山市、名古屋市の3市がフェアに参加しました。特に大崎市は2つのラムサール登

録湿地を有し多様な生き物と共に暮らす循環型のまちづくりをを目指す取り組みが注目を集めていました。

世界各国から集まった人たちによる国際色豊かな雰囲気の中で、我が大崎市の特徴ある取り組みや地域の紹介をしました。マガンとヒシクイをシンボルにした2つのラムサール条約登録地、絶滅危惧種シナイモツゴが生息する鹿島台地域、日本有数の観光地で旨いお米の生産地であることなどを最大限PRし、大崎市特製の人気シール300枚を配付し2日間の予定を無事終了することが出来ました。全出展ブースを見学する予定でしたが、時間が無くてあまり見る事が出来ず残念でした。



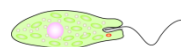
里親の飼育技術マニュアルができました

シナイモツゴを卵や稚魚から育てる里親は、当会の自然再生活動の一翼を担う大切なパートナーです。かねてから要望の多かった里親用の飼育マニュアルが3月に完成しました。何と3部構成です。第一部はシナイモツゴを卵から育てる飼育技術を里親小学校用にイラストと簡易な表現でやさしく解説しています。第二部はシナイモツゴを水槽で育てる一般の里親用です。ここではミジンコ研究会が開発したミジンコのペットボトル培養法も紹介されており、上級者にも喜ばれそうです。第三部はため池を管理する里親用です。ため池は淡水魚のHot Spotであり、これを保全するための方法としてブラックバス駆除、シナイモツゴやゼニタナゴの移植を含む保護技術などがたくさんの写真を使って紹介されています。

いずれも、他に例の無い新しいコンセプトの解説書です。様々な場所で活用していただくため多量に印刷しました。希望される会員に提供しますのでご連絡下さい。なお、このパンフレットの内容はHPでも公開予定です。



ペットボトルを用いたミドリムシ培養実験



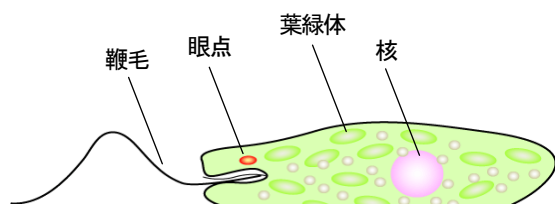
久保田龍二

【はじめに】

シナイモツゴ郷の会では、シナイモツゴ人工繁殖を簡易化し、ふ化稚魚をガラス水槽で観察しながら育てることで、多くの人に関心を持ってもらい里親を増やしていきたいと考えています。そのために、ふ化稚魚の餌となる微少な生物をペットボトルで誰でも簡単に増やすことが出来るようにするためミジンコ勉強会メンバーにより培養実験を行っています。

昨年度の成果として、多少の課題はあるもののタマミジンコをペットボトルで容易に且つ大量に増やすことに成功しました。しかし、タマミジンコはやや大きいため、生まれたての稚魚では食べられないことが分かりました。

そこで今年度はタマミジンコよりも小さい**ミドリムシ**の培養にチャレンジすることになりました。



【ミドリムシ概略図】

ミドリムシ植物門:鞭毛運動をする動物的性質を持ちながら同時に植物として葉緑体を持ち光合成を行う生き物

【培養方法】

ミドリムシの培養方法は、本来、煮沸した水と滅菌した容器などが必要ですが、「だれでもできる」という観点で簡易に行うため市販のミネラルウォーター（無菌状態の水と容器が容易に手に入る）を用いました。これにミドリムシの栄養として液肥(園芸用のハイポネックス)を 1/1000 の濃度になるように入れて培養液の完成です。

次にミドリムシの入手ですが、ミジンコのように田んぼや池で採集してくるのは難しいため自宅で発生させました。発生方法はミジンコ培養実験でグリーンウォーターの基として丹野さんが考案された三種混合液

(通称)を作成することでミドリムシを発生させました。三種混合液とは、米ぬか・魚粉・鶏糞を等量の割合で水溶液にしたものです。この液中でミドリムシが高密度で発生することが分かっています。ここからミドリムシを抽出するわけですが、本来ならばパスツールピペットというガラス管を細くした器具を用い顕微鏡下で1個ずつひろっていくのですが、素人の私には難しくて出来ませんでしたので、完全な純培養はあきらめて上記混合液のミドリムシ濃度が濃い部分をペットボトルに入れて培養開始しました（若干他の微生物も混じった培養）。

【実験結果】

下の写真のとおり培養開始(5月30日)後4日目くらいからボトル内の表層部が緑色になり、7日目にはボトル全体が緑色になり、9日目ではボトル全体で緑色が濃くなり 1ml 当たり 4900 個の密度に増えました。また、完全な純培養ではないものの増殖している生物はほぼミドリムシだけでした。なお、シナイモツゴ飼育実験により、ふ化稚魚の餌としてミドリムシが有効であることも確認されました。飼育実験結果については次号にてご紹介します。



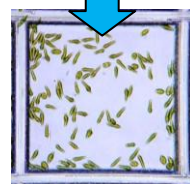
培養開始

4日目

7日目

9日目

培養したミドリムシの顕微鏡写真
(枠の大きさは0.5mm×0.5mm)



2つのシンポジウムを開催し

水辺の生物多様性の保全戦略を議論

① 共同シンポジウム「水辺の自然再生－よみがえる魚たち」

全国ブラックバス防除市民ネットワークなどと共催、大崎市や大阪コミュニティ財団などの後援を受け COP10 パートナリシップ事業として 10 月 23 日に大崎市古川の宮城誠真短期大学で開催しました。130 名が参加し、基調講演 3 課題と話題提供 12 課題の講演があり、これまで最大規模となりました。

第一部の自然再生活動と環境保全では水辺の自然再生における田園の役割と農業者の取り組みの重要性が強調され、保全のための独自の取り組みが紹介されました。環境保全米を試食しながらの意見交換会では、各地で取り組む農業者の自然再生団体が連携して、消費者の協力と参加を呼びかけようという意見が出されました。

第二部の「自然再生活動でよみがえる魚たち」では生物多様性の保全に向け種多様性と遺伝的多様性の「現状、なぜ、どのように」を中心テーマとし、三重大大学の淀太我准教授と東北大学の池田実准教授が講演しました。淀准教授は種多様性の大切さや現在これまでにない速度で絶滅が起きており、この保全が急務であることを強調しました。東北大学の池田准教授は遺伝子攪乱が多く種の発生し極めて危険な状態にあることや種苗放流に際して遺伝的多様度を保全するためには十分な親魚を確保するなどの対策が必要であるなど実践的な提案を行いました。

話題提供 1 「在来魚復元の取り組み」では 6 課題の報告があり、北海道、岩手県、宮城県、福島県、東京都の団体が取り組み状況と新技術を紹介しました。それぞれ、独自の体制と取り組みの実践例が示されました。



シンポジウム「よみがえる魚たち」の会場風景

話題提供 2 「よみがえる魚たち」では市民団体による自然再生の 4 つの成功事例が紹介されました。いずれも、劇的な復元に成功しており、参加者から驚嘆の声が上がりました。これらの事例はいずれも自然再生活動のモデルとして大変重要と考えられます。

最後に全国ブラックバス防除市民ネットワークの小林光氏を座長として総合討論が 1 時間にわたって行われました。この中で、東京や関西地方の参加者から、農業者による連携の重要性について改めて認識したという感想が述べられました。また、外来魚駆除においては外来種を拡散させないなど十分な影響軽減策を実施し、遺伝的多様性への影響に関しては科学的な根拠に基づいて実施することが大切であることを参加者全員で確認しました。

②ミニシンポジウム「水辺の生態系多様性」

2011年2月19日(土)に宮城県大崎市鹿島台で全国ブラックバス防除市民ネットワークと共催で開催したところ、約60名が参加し、貴重な講演と熱心な討議が行われました。

最初に二宮理事長が次のように趣旨説明しました。昨年10月開催の共同シンポジウム「よみがえる魚たち」では、種多様性と遺伝的多様性の保全について認識を深めることが出来たが、さらに、生物多様性保全を推進するためには、生態系多様性の復元をめざす必要があります。この復元について最新理論を学び、実践のための意見交換を行うことを目的としてシンポジウムを開催します。

基調講演では魚類学会自然保護委員会委員長の細谷和海近畿大学教授が、新しい生態系多様性の考え方を整理しわかりやすく解説しました。特に超個体群を保全単位とすべきであるとの考え方は、復元を考える私たちにとって非常に興味深いものでした。超個体群とは、通常独立した局所個体群が氾濫などにより100年に1回など稀に遺伝的交流する集合的な個体群を意味します。

話題提供では、ブラックバスフェロモンの先端的研究を担っている宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団の藤本泰文研究員から全国的に注目されている伊豆沼の復元について総括的な報告がありました。様々な、駆除技術で有効なのは繁殖阻止であり、様々な手法を組み合わせ長期間、粘り強く継続することにより著しい成果をあげました。今後は、根絶するための技術開発と取り組んでいくという決意が表明されました。

さらにシナイモツゴ郷の会高橋清孝副理事長が、新たに開発したゼニタナゴ保全技術を踏まえて、ため池生態系の復元戦略を初めて紹介しました。ため池は、長期にわたり安定して、低コストで、野外環境の中で多くの種を保存可能であり、種多様性保全にとって極めて重要な生態系です。ため池生態系を活用し、絶滅危惧種の生息域を拡大する技術を開発中であることを報告しました。

総合討論では、超個体群の遺伝的多様性をどのように維持するかなどについて議論されました。絶滅危惧種は閉鎖的な環境に生息しており、現在、これらが洪水などによって自然環境で交流を期待することはほとんどできません。したがって、今後は人為的な交流を含めた遺伝的多様性の保全が必要になるなどの意見が出されました。これに対し、細谷教授から、多様な生息環境へ移植しその中で長期繁殖させることにより、全体的に多様な遺伝的多様性を確保する。さらに、それぞれの生息場で長期繁殖し近交の影響が見られた場合に人為的な交流を行うことにより、遺伝的多様性を確保しながら、生態系を保存することができるであろうとする実際的な戦略が示されました。

今回、議論の中心になった超個体群を保全の単位とすべきとする考え方は、これまでの移植などによる生息地拡大を同一水系に限定する考え方を修正するものであり、極めて实际的で現実的です。この考え方を導入することにより自然再生活動が大きく進展すると考えられます。この議論は今回始まったばかりであり、今後、シンポジウムなどで、全国の市民



2月開催のミニシンポジウム講演風景(鹿島台)

団体、行政機関、大学および関連機関に呼びかけて、全国的で全体的な議論を展開する必要があると思います。

東北のエビ類－ヌカエビ、スジエビ、テナガエビ 水辺の仲間たち②

高橋 清孝

東北地方の淡水エビの中で最も人気があるのはヌカエビ(地方名:沼えび)です。体長 3cm 前後

の最も小型のエビで、かつて沼や小川からの最高の恵みとし珍重されました。1950 年頃までの旧品井沼周辺、あるいは 1990 年頃までの伊豆沼では、多くの人々がヌカエビを捕り、生活の糧にしていました。ヌカエビを販売する行商から周辺の住民は競って購入し、釜揚げ、かき揚げ、えび餅などにして食べました。当時は、少し贅沢なタンパク源だったのです。

ヌカエビを漁獲するには通常柴漬けという漁法を用います。笹や杉の枝を束にして結わえて池沼の岸近くに沈めて

おき、数日経過してから、ゆっくりと枝の束を持ち上げ、三角網などで下からすくい取ります。また、伊豆沼などでは手繰網（船上から網を手でたぐりよせる）などで大量に捕っていたようです。土水路では水生植物や岸から垂れ下がった草などの中に潜んでいるヌカエビを三角網で簡単にすくい取ることが出来ました。種名はこのエビを捕るときにモンドリの餌としてよく使われる糠にちなんでいるとの説があります。

スジエビはヌカエビより一回り大

きく、透き通った体に黒いスジの縞模様がハッキリと見えますので簡単に区別できます。水槽でも簡単に飼育できますが、メダカやシナイモツゴなどと一緒に飼うとこれらを攻撃しますので要注意です。ため池で普通に見られ、柴漬け(ナラッパ)などで採集します。釜揚げやから揚げなどにする



かつての品井沼や伊豆沼ではヌカエビがたくさん捕れた



自慢のエビ餅はヌカエビが最高です。



縞模様が鮮やかなスジエビ、全長 5cm

と大変美味です。釣り餌にも用いることがあります。海にはよく似た種類でスジエビモドキが藻場に生息しています。

テナガエビはハサミのある手（歩脚）が体長よりも長く、優雅な姿をしています。伊豆沼では特殊などうを使って大量漁獲しましたが、最近はとても少なくなりました。数年前、琵琶湖博物館のレストランで名物の外来種井を食べたところ、オクチバスの横にテナガエビが載せられており、大層びっくりしました。何と、琵琶湖では国内外来種としてたくさん漁獲されていました。幼生期は汽水や海水中で育つ事が多いそうです。

ヌカエビは水水草の中に潜みみ表面に付着している微細な藻類を主に食べます。スジエビは夜になると水草の中から抜け出して行動開始し、藻類や小さな水生昆虫やユスリカなど小動物を好んで食べます。テナガエビは水底を徘徊して、水生昆虫、ミミズ、小魚などを食べる肉食性です。

いずれも住家となる水草や餌となるたくさんの藻類や小動物が必要です。エビ類はブラックバスの大好物なので最初に食い尽くされて全滅してしまいます。また、アメリカザリガニも水草を食い荒らして住家を奪い、餌も競合するので天敵と考えられます。

東北地方在来のエビ類は多様な在来種が生息する生態系でのみ繁殖できる貴重な生き物です。



長いハサミ付きの手を持つテナガエビ、全長 10cm と大きい



テナガエビは伊豆沼でも見られなくなりましたが、琵琶湖では外来種の天井として超人気でした。

小学校副読本にシナイモツゴ郷の会の取り組み紹介

成田智哉(利府町立菅谷台小学校)

この度、平成23年度版、学研教育みらい版道徳の副読本『みんなのどうとく（宮城県版）』にシナイモツゴ及び「シナイモツゴ郷の会」の取組を書かせていただきました。

学習研究社（当時）から道徳の副読本の原稿作成依頼があった際、私は宮城教育大学附属小学校に勤務しており、校内研究の主題のもと、理科の研究を行っていました。

そこで、道徳の副読本執筆のお話をいただき、何を書いたらよいのか、宮城県版として何を題材として取り上げたらよいのか迷いました。思い浮かぶ事柄をメモ帳の1ページに書き出したのが、執筆



筆にかかわる仕事の始まりでした。メモには「石ノ森章太郎」「シナイモツゴ」「ゼニタナゴ」「テツギョ」「仙台七夕」「仙台白菜」等が順に書かれました。宮城県で有名なものと考えた際に浮かんだのがこれらでした。すぐに魚類が3種類浮かんだのは、父親の影響で幼少の頃より自然が大好きで、溪流釣りをしたり、魚を捕って飼育したりしてきた経験が影響したのだと思います。だからこそ、思考の過程で、「宮城の魚といえば」というようにこれらの名前が浮かんできたのだと思います。

資料を集める作業を進める中で、より強く印象に残ったのがシナイモツゴでした。シナイモツゴは、それまで実物を見たことがなく、図鑑等で名前やその形態を知っている程度でした。しかし、貴団体のホームページが大変充実していたので、シナイモツゴという魚についてよく理解できました。また、この貴重な魚を保護し育ていくという取組を詳しく知っていくうちに、宮城県の子どもたちに伝えるべき、いや伝えなくてはならないと思い始めたのでした。そのとき、取材に快く応じてくださったのが、現理事長の二宮景喜先生と副理事長の高橋清

孝先生でした。

私が描きたかったことの中心は、なんとと言っても60年ぶりにシナイモツゴを再発見したときの高橋先生の気持ちです。また、その後の保護活動、そこにかかわる人々の熱い思いや願い、葛藤をありのままに表現したいと思ったのでした。同時に、多くの野生生物が絶滅の危機に瀕している現状において、地域に生息している生物を守り、そこに存在した豊かな自然を取り戻そうと協力して活動に取り組んでいる人々がいることを、子どもたちに伝えたいという思いが強まりました。これらの活動について知り、携わる人々の思いを考えることは、地域の自然を見直し生命を大切にしようとする気持ちにつながることも考えました。

郷の会の先生方のご協力をいただき、取材は進みました。また、発見場所の「桂沢ため池」にも何度か足を運びました。回りの土地よりやや高い所にあることや、道路から離れた奥の方にひっそり存在していることから、幻の魚が長年守られ続けてきた場所なのだと強く実感できました。

執筆を進める中、文字数の制約や自身の文才の問題から「郷の会」の方々の思いや願いを正確に伝えることが

できるのかという悩みが常に付きまといました。最も悩んだのが外来魚の取り上げ方です。特定外来生物の取り扱いが法律にまで規定されているように、外来種の存在は在来種の生存を脅

宮城県の魚みづ



シナイモツゴの見つかったため池

みなさんは、日本にいる魚の中に、宮城県の地名のついた魚がたった一しゆるいだけいるのを知っていますか？
げんざいの宮城県大崎市鹿島台に広がる大きな田んぼは、むかし、品井沼という大きな沼でした。その品井沼がもたなくなって名前がついた魚、それが、シナイモツゴです。このシナイモツゴは、これまでの六十年間、県内では発見されていませんでした。平成五年、宮城県の水さんしけん場の高橋清孝さんらのちようさによって、鹿島台のあるため池で、まぼろしの魚といわれていたシナイモツゴがさい発見されたの



(9)

かし、生物界において大きな問題になっています。今や外来種の駆除なくして、環境保全が成り立たないといっても過言ではないことは承知していました。

38

宮城県の宝

しかし、「道徳」には、命あるものや自然環境を大切に
するという目標があります。また、郷土を愛するという
目標もあります。シナイモツゴの保護と外来種の駆除。
この現実をどう扱うか、編集会議でも議論を重ね、在来
種を脅かす外来魚の存在を知らせながら、増やす活動を
中心とすることを確認しました。これが最善であったか
は、様々なご意見のあることと思います。ただ、未来を
担う子どもたちにこの現状を知らせ、考えるきっかけを
与えることができると考え、苦渋の末、決断しました。

シナイモツゴは、宮城県の地名がその名の由来になっ
た唯一の魚。もともと「鹿島台の宝」であったと思うの
ですが、私は、この貴重な魚の発見および努力を重ねて
いる保護活動は、宮城県の誇りにふさわしいと考え、題
名を「宮城の宝」とさせていただきます。

70年ぶりのクニマスの発見、マリアナ諸島付近での

ウナギの卵の発見など、地道に行ってきた活動や魚類の
研究が大きな成果として実を結んでいる昨今です。これ
はひとえに、「もともとその地域にいる魚を大切にしたい」
という人々の願いが産んだ結果であると考えます。「シナ
イモツゴ郷の会」の活動は、まさにその典型であり、全
国展開をしている貴団体の活動は、これからも日本固有
の生物の保護・再生活動の模範であり続けていただきた
いとお祈念申し上げます。シナイモツゴとの出会いが、
多くの人々との出会いにつながり、私にとって大きな財
産になりました。最後になりましたが、突然の取材に
もかわらず、快く応じてくださいました、二宮景喜先
生、発見当時のことを詳しく教えてくださった高橋清孝
先生をはじめとする会員の皆様に心より御礼申し上げま
す。

シナイモツゴBC通信から (No. 181 : 12月11日配信)

会員の情報共有のための配信メールです。受信ご希望の方はご連絡下さい。

みなさま

師走に入り、本格的な冬への準備や残務整理、来年の準備などで慌ただしくなってきました。

イベント情報

① 定例会・理事会

期日：12月18日（土）18:00～

場所：鹿島台公民館

飼育マニュアル作成打ち合わせ、イベントジャンパーの試着 理事およびスタッフはなるべくご参加ください。

② ゼニタナゴ調査

期日：12月19日（日）9:30～

場所：鹿島台広長地区（Aさん宅他）

タガイやヌマガイに産み付けられた卵、の調査が中心
参加される方は高橋までご連絡ください。

③ H23 年度総会

H23年2月19日午後4時（予定）、大崎市鹿島台

④ ミニシンポジウム

「生態系多様性の復元とは？…郷の会これからの
方向性を考える」

H23年2月19日午後2時から 大崎市鹿島台

⑤ シナイモツゴ郷の米収販売中

当会が認証する生き物環境保全米、シナイモツゴ郷の
米をシナイモツゴ郷の米づくり手の会が販売中です。

購入問合わせ先：

づくり手の会事務局 菅井さん 0229-56-5746

成果情報

① シナイモツゴ郷の米づくり手の会例会に参加

12月8日につくり手の会の例会に参加しました。米価
が急落する中で堅調な販売が続いています。地道な
PR活動が着実に実を結んでいるようです。

② ヒシ水田の整理

懸案の雑草などの処理を12月2日に完了しました。
参加された方々、ご苦労様でした。

③ 政府インターネットTVで郷の会の活動が紹介されています。

8月31日に環境省広報番組の収録があり、下記ホ
ームページで長期放映中です。

政府インターネットテレビ 21ch 地球環境

鹿島台小学校、桂沢ため池、郷の米が「田尻のふゆ
みずたんぼ」と共に紹介されています。

シナイはアイヌ語で大きな川(沢)を意味します。小さな流れが大きな川になるように地道な活動を続けていきましょう。